



けやき通信

Faculty of Education, Gunma University News. "Keyaki"

第9号 (2019年2月)

2020年、教育学部と教育学研究科の新しい挑戦

— 宇都宮大との共同教育学部の開設、教職大学院の拡充 —

教育学部長 斎藤 周

すでに新聞報道等でご存じの方も多いかと思いますが、群馬大学は宇都宮大学との共同教育学部を2020年度から開設すべく準備を進めています。これは全国初の試みで、群馬大学と宇都宮大学が連携し、授業を出し合っ、共同で教育学部の学生を教育するというものです。このしくみの下でも、学生は、それぞれの大学の入試を受けてそれぞれの大学に入学します。

共同教育学部では、学生は、卒業に必要な授業の約2割について、他方の大学が提供する授業を履修します。両大学の学生がそれぞれ他方の大学からの授業を履修するので、合同授業の比率は計4割程度になります。授業担当教員は一方の大学の教室にいますが、両大学の教室に学生がいて、二つの教室はメディアで結ばれます。教員の話や学生が聴くだけではありません。最新のシステムが画像と音声を双方向で中継し、質疑応答や学生どうしのディスカッションも可能です。また、メディア経由だけではなく、ときには一つの場所に集まっての交流も行いたいと考えています。このような相互交流を通して、学生たちは知的な刺激を与えあいます。また、多種多様な専門分野をもつ両大学の教員から学べることも多く、学生が広い視野を獲得することが期待できます。

共同教育学部の設置は、学生が取得できる教員免許状という点でも大きな意味をもちます。現在、国立大学の予算は年々削減され、教育学部の教員数も削減が続いています。また、少子化が進む中で教員の需要は今後大きく減少することが予想され、教育学部は縮小を迫られています。教員免許状を学生が取得するには、教育学部に一定数の教員がいることが必要です。本学部は中学校については10教科すべての教員を養成していますが、このまま学部の教員が減っていくと、それができなくなっ

てしまいます。ところが共同教育学部という形をとると、両大学合計の教員数で中学校10教科の免許についての基準を満たすことが可能になります。本学部は、こうすることによって、群馬県という地域における教員養成の責任を果たし続けていきたいと考えています。

一方、大学院教育学研究科では、共同教育学部設置と同じ2020年度に、教職大学院を拡充する予定です。これに伴い修士課程は廃止します。これまで主に修士課程で学修していた各教科の教育と特別支援教育を教職大学院に移行させて、学校マネジメントのあり方を探求するコース、教科の教育実践を主眼とするコース、特別支援教育の実践を深めるコースの3コース制にします。

教職大学院は、現職教員を含む大学院生たちが教員としての実践的指導力を高めるべく学修する場です。その拡充にあたっては、県との人事交流を拡大させ、学校現場や教育行政での豊富な経験をもつ方を実務家教員としてこれまでより多く迎え入れます。また、本学部には学校現場での勤務経験をもつ研究者教員が何人もいますので、これらの教員もその経験を活かして大学院生の教育にあたります。そして、各教科の内容となる諸分野を専門とする研究者教員も、教育実践に関する識見を深めて教職大学院の拡充に備えています。

2018年に行われた群馬県の教員採用試験では、小中学校・特別支援学校の合格者数のうち本学部・研究科の出身者が4割を超えました。教員養成を通して群馬県の子どもたちの学びを支える私たちの責任の重さを、ひしひしと感じています。共同教育学部の開設も教職大学院の拡充も、この責任を果たすための新しい挑戦です。挑戦を続ける群馬大学教育学部・教育学研究科に、これからもご支援をいただけるようお願いいたします。

ぐんまの教師力を高める 2018：アクティブ・ラーニングとは何か《第3回》

－「つくる、みる、振り返る」の循環システムを取り入れた授業づくり－

専門職学位課程長：山口 陽弘

11月18日（日）14時より、群馬大学教育学部C204教室において、公開シンポジウム「ぐんまの教師力を高める 2018：アクティブ・ラーニングとは何か第3回」『つくる、みる、振り返る』の循環システムを取り入れた授業づくり（主催：国立大学法人群馬大学と群馬県教育委員会との連携に係る協議会、共催：前橋市教育委員会）が、教育関係者約90名の参加のもと開催されました。

シンポジウムでは、窪田健二・群馬大学副学長、山口政夫・群馬県教育委員会教育次長の挨拶に続き、本学教職大学院・大学関係者4名の報告コメントがあり、県教委から星野浩章・同義務教育課指導主事、宮村奈々江・特別支援教育課指導主事よりコメントがありました。

当日の司会も務めた山口陽弘専門職学位課程長より最初に問題提起があり、アクティブ・ラーニングについて三年連続してあえてこのテーマ設定にした理由は、これは古くて新しい永遠の課題であり、年によって追求すべき課題を変えずに、ごく常識的に優れた教育を目指すべきであり、その優れた具体例が、今回報告される福島先生の実践であると述べました。

次に教職大学院9期生の福島裕美先生（実践当時・前橋市立芳賀小学校、現・前橋市立永明小学校）から、大学院での課題研究とその中心となった実践について報告がありました。実践は小学校6年生での図画工作科を中心として、社会科や国語科との間を繋げた教科横断的な研究でした。図画工作科において、表現と鑑賞とを巧みに組み合わせ、自分の表現活動を一回切りのものではなく、必ず振り返りをしてブラッシュアップしていきます。そこでの振り返りが生きた知識・技能として次の単元に必ず繋がるような年間での授業設計がなされており、それが特定教科内で完結するのではなく、他の教科に繋げるような授業設計がなされています。具体的な実践事例としては、図画工作科の物語から感じたこと想像したことを絵に表す活動と国語科教材での宮澤賢治の「やまなし」とが有機的に結びつけられ、深いレベルでの読解に結びつく表現活動がなされます。

これらの活動は個人単位ではなく、集団での対話的な表現・読解活動でした。実際の授業の映像、そこで制作された数々の創造的な色彩の児童の絵画、児童の主眼的な様子がうかがえる発言、実践前後のアンケートにおける意識面の向上（変容）を示す資料も提示されました。

福島先生の実践はまさに深いレベルのアクティブ・ラーニングの授業提案でした。

教職大学院の大島みずき講師からは、直接の指導教員として、福島先生の授業が常に「深い」「対話的な」「主体的な」学びを促す学級の雰囲気のもとに行われていたことが紹介されました。

本学国語教育講座の濱田秀行准教授からは、実際の授業の様子について複数の写真が具体的に示され、福島先生の授業実践において、子どもの「主体的・対話的で深い学び」が高い質で実現されているということが説明されました。さらに、より深い学びを追求することを考えるのであれば、絵画を作成する過程で再度、作品を読むなど、もどしてつなぐことを促すと良いのではないかと提案がなされました。また、アクティブ・ラーニング型の授業をするには時間が足りないという意見に対して、「教えることは聴くことであり、学ぶことは話すことである」というデボラ・マイアーの言葉が紹介され、教師主体の説明で授業を進める授業観を見直し、授業中の活動のひとつひとつについて子どもにとっての意味を考えるべきであるとの指摘がなされました。

さらにお2人の指導主事からは、福島先生の実践に対する高い評価とともに、現場でアクティブ・ラーニングにとりくむにあたっては、児童に身に付けさせたい「**力」というのは、実は「**する」という言葉に置き換えることで分かるように、児童主体の視点を入れることで授業改善を続けていくことが重要であること、そしてそれは既に群馬県で作成され、ネット上でも公開されている「はばたく群馬の指導プラン」と共通しているので、アクティブ・ラーニングを目指す現職教員はぜひこの「はばプラ」を利用して欲しいという指摘がなされました。以上の報告をうけ、フロアとも活発な質疑が交わされました。

最後に本学齋藤周学部長から、閉会の挨拶がなされ、本年度も本シンポジウムは充実した内容になったと思います。



▲ 福島裕美先生（前橋市立永明小学校教諭・教職大学院9期生）

オープンキャンパス報告

入学試験委員長 永由 徳夫

教育学部オープンキャンパスは、例年通り“海の日”7月16日（月）に開催され、全学オープンキャンパス「GU'DAY2018」は前年度実施の7月開催に加え、8月にも企画されました。

○教育学部オープンキャンパス

例年、全体説明会会場に人が溢れてしまうことから、今年度は説明会を2回開催することで改善を図りました。また、創意工夫がなされた専攻別プログラムは、高校生の興味・関心を引いていました。

参加者は910名（高校生593名・保護者317名）、昨年度の801名に比し、100名以上の増となりました。この日は38度という、過去10年の中で、最高気温をマークしましたが、気温を超える熱気に荒牧キャンパス全体が包まれているように感じました。

○全学オープンキャンパス「GU'DAY2018」

7月8日（日）・8月17日（金）の両日、荒牧キャンパスにて開催されました。教育学部教員による説明会・体験授業は、たいへん盛況でした。また、個別の進路相

談コーナーでは、高校生が教育学部生に熱心に質問をする様子が見受けられました。参加者数は以下の通り。

7月8日：693名（高校生460名／保護者233名）

8月17日：1620名（高校生1180名／保護者440名）

3日間とも酷暑・炎暑の中での開催となりましたが、いずれも盛況裡に終了しました。入学後の調査では、オープンキャンパスがもっとも志願者数に結びつくとの結果が出ています。平成31年度入試における志願者増を期待してやみません。



▲ 教育学部オープンキャンパス（7月16日）

「科学の甲子園」群馬県大会を開催

理科教育講座（科学の甲子園実行委員） 日置 英彰、大谷 龍二

科学の甲子園は、高校生を対象に理科・数学・情報における複数分野について、高校別対抗で行われる競技です。チーム内で相談しながら、競技をおこなうことが大きな特徴で、科学コミュニケーション能力が重要となります。この大会の群馬県代表校を決める大会を本学荒牧キャンパスにおいて、群馬県教育委員会との共催で毎年開催しています。本年度は15校の高等学校から、合計120名の生徒が参加し、二日間にわたって筆記競技、実験競技、課題実技競技に取り組みました。実験競技では、実験方法の立案からレポートの作成まで、チーム内で協力、協働して行われました。課題実技競技は、競技が行われる約一ヶ月前に課題が提示されます。本年度の課

題はシャトルコックを決められた位置に正確に飛ばす装置を作製するもので、各校とも大変ユニークな発射装置を考案しテストを重ね、競技に臨みました。結果は四ツ葉学園中等教育学校が初優勝し全国大会に出場します。

競技の後は「サイエンスコミュニケーションゲーム」を行い、他校の生徒との交流を楽しみました。また、運営に参加した本学の学生との交流を通して群馬大学の暖かい雰囲気も感じてもらえたと思っています。なお、本年度の大会の様子は県教育番組「はばたけ！ぐんまの子どもたち」で放送されました。ぐんま教育チャンネルのサイトから閲覧も可能ですので是非ご覧ください。



▲ 課題実技競技



▲ サイエンスコミュニケーションゲーム

平成 31 年度採用群馬県教員採用試験結果

学生支援委員長 大谷 龍二

平成 31 年度採用群馬県教員採用試験の本学合格者は、現役 126 名、既卒 43 者名、合計 169 名となりました。また、全体合格者に対する占有率は、小中学校 42.5%、高等学校 17.5%、特別支援学校 30.0%、全体では 38.8%でした（表 1）。校種により採用状況が異なるため、単純に比較できませんが、概ね昨年を上回る結果となりました。表 2 には、平成 27 年度から 31 年度までの群馬県教員採用試験志願者数（現役生）に対する一次・二次試験合格者数と合格率を示しています。平成

31 年度採用の一次試験合格率は 78.1%、二次試験合格率は 67.4%となっています。二次試験の合格率は過去 5 年間で最高となりましたが、これに満足せずさらなる飛躍が期待されるところであります。

学生支援委員のみならず全教員で学生の進路支援に取り組んでいただくとともに、学生の皆さんにも、教員採用試験対策講座や講演会などの支援事業に、より積極的に参加していただく必要があると思います。今後とも、学生支援委員会の事業にご協力をお願い申し上げます。

表 1：群馬県公立学校教員採用試験の校種別結果と占有率（既卒者含む）

平成 31 年度採用	全体合格者数	本学合格者数			占有率	
		現役	既卒者	合計	現役	全体
小学校	82	11	9	20	13.4%	24.4%
中学校	264	102	25	127	38.6%	48.1%
小中学校 計	346	113	34	147	32.7%	42.5%
高等学校	40	4	3	7	10.0%	17.5%
特別支援学校	50	9	6	15	18.0%	30.0%
全合格者 合計	436	126	43	169	28.9%	38.8%

表 2：群馬県公立学校教員採用試験本学志願者数（現役生）と合格率

採用年度	志願者数	一次試験合格者数 (志願者に対する合格率)	二次試験合格者数 (志願者に対する合格率)
平成 31 年度	187	146 (78.1%)	126 (67.4%)
平成 30 年度	179	149 (83.2%)	110 (61.5%)
平成 29 年度	170	120 (70.6%)	106 (62.4%)
平成 28 年度	176	124 (70.5%)	102 (58.0%)
平成 27 年度	196	149 (76.0%)	120 (61.2%)

準硬式野球部・全日本選手権出場を果たして

顧問 河内 昭浩

群馬大学荒牧準硬式野球部は、今年度、北関東春季リーグ戦を制し、約 10 年ぶりに、文部科学大臣杯全日本大学準硬式野球選手権大会（第 70 回）への出場を果たしました。結果は、1 回戦を見事突破、2 回戦にて敗戦（ベスト 16）となりました。1 回戦（対：九州共立大）は、平成 30 年 8 月 20 日（月）、静岡・天竜球場で行われ、9 対 2 で勝利しました。先発の石田投手、救援の木暮投手の好投に応え、打線も 3・6・7・8 回と得点を重ねた見事な試合でした。2 回戦（対：京都産業大）は、翌日、浜松球場で行われましたが、前日の疲労もあってか投手陣が崩され、終盤得点を返すも、2 対 7 での敗戦となりました。

本選手権出場に際し、後援会、同窓会、並びに同野球部 OB・OGの方々から、多大なるお心遣いを賜りましたことを、この場をお借りして心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

全日本選手権出場という経験は、これから教職に就く若者たちにとって、本当に貴重な財産となることでしょう。今回の経験が、これから出会う子どもたちへと還元されることを願ってやみません。

今年のチームは、栗原主将の統率力のもと、団結力の強い、素晴らしいチームでした。来年以降も全日本選手権に出場できるよう、準硬式野球部として、日々精進できればと思います。今後ともご支援の程、何卒宜しくお願い申し上げます。



群馬大学教育学部ニュース「けやき通信」 第 9 号（2019 年 2 月）

発行：群馬大学教育学部

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町 4-2 / TEL：(027) 220-7204 / URL：http://www.edu.gunma-u.ac.jp/cms/

・本紙に関するご意見ご感想等ございましたらお寄せください。